

地域スポーツ集団の親睦志向と競技志向の関係

金子守男・李 真・仲野隆士

The relationship between freindship oriented and competition oriented of local sport group

Morio Kaneko, Zhen Li, Takashi Nakano

The purpose of this study was to analyze whether the preference of local recreational sport is freindship oriented or competition oriented. The subjects were members of 144 recreational softball teams. The total number of them was about 3000 men and women, aged from twenties to fifties and had been living in Chita district of Aich prefecture.

Firstly, the aims of sports activities were classified into 11 items by using Hayasi's quanification theory III.

Secondly, the correlation among four team-attributes was investigated.

As the result, it was noted that 1) aims of sports activities were classified into six groups, showing that attributes of freindship oriented preference differed from those of competition oriented, and 2) freindship oriented/compettition oriented had somewhat negative relation. It was also found that two activities oriented were influenced by renewal of team member.

はじめに

地域スポーツは競技スポーツと性格を異にするレクリエーションなスポーツ活動であるというのが一般的な見解である。レクリエーションなスポーツ活動では、高度な技術の追求や試合での勝利に重点を置くことよりも、体を動かすことや試合を楽しむことに重点が置かれており、従ってこの種の活動は、しばしば参加者同士の親睦や交流を果たす手段として実施される場合が多い。

特に地域スポーツ活動には、こうした媒体としての側面がよりいっそう強調され、地方自治体が主唱するところのコミュニティ(地域社会)形成運動の一環として貢献することに、従来より大きな期待が寄せられてきた。

しかしながら地域スポーツ活動の意図する方向が、競技スポーツ活動のそれと違っていても、

最終的に試合が勝敗を決する以上、参加者には多少なりとも勝敗に対するこだわりが生じていくものと考えられる。こうしたことを考えると、地域スポーツ活動において主要目的とされる参加者間の「親睦・交流」が、二義的とされる「勝敗」といかなる関係を有しているのか、というのが我々の問題意識であった。

従って本研究は、地域スポーツ活動における「親睦志向」と「競技志向」との関係を検討しようとするものであるが、こうした分析を行っていくうえで、地域スポーツ活動がコミュニティ形成運動に関わっていく過程で生じていく問題点を抽出していくことにも目的を置いた。

研究の方法

レクリエーションなスポーツ活動を目的とする地域スポーツ集団を調査対象に、チームの

責任者と構成員にアンケート調査を行なった（アンケート調査の回収状況は表1に示す）。分析の手順は次の2点に集約される。

1) まず、調査対象としたスポーツ集団がレクリエーションな活動を主要目的とする集団であることを確認し、次に被調査者の活動目的の分類を行う。

2) 「チーム創部来の年数」「年間勝率」「古いメンバー率」「試合参加率」といったチームの属性間の相関を調べる。

結果と考察

本研究の調査対象に選出した地域スポーツ集団は、近隣住民でチームを構成することが規約化されている近隣集団である。この地域スポーツ活動は発足して以来すでに10年強を経過しており、集団が長期間にわたりスポーツチームとして活動を継続していくには、部員の新陳代謝が必要とされる。従ってこの地域スポーツ活動では、チームが活動を継続していくにつれて、周囲の近隣住民をこのスポーツ活動に参加させていくといった、いわゆる地域集団編成のための契機としての役割を果たしているところに、まず1つの特徴がある。

表1 調査表の回収状況

調査対象	配布数	回収数	有効回答数
チーム責任者			
A市	102	84(82.4)	84(100.0)
B市	50	36(72.0)	36(100.0)
C市	30	24(80.0)	24(100.0)
チーム構成員			
A市	1500	1363(90.7)	963(70.1)
B市	800	646(80.8)	433(67.0)
C市	700	671(95.9)	604(90.0)

()=%

表2 チームの活動目的

	A市 N=84	B市 N=36	C市 N=24
健康や体力の保持増進	46	22	18
参加者間の交流を図る	68	20	24
ゲームを楽しむこと	41	19	3
技術を向上させること	4	1	0
ゲームで勝つこと	2	2	2
特になし	1	0	0

多くの地域住民を地域スポーツ活動に参加させていくためには、そのスポーツ種目の特徴を生かしたまま、しかも高度な技術が要求されなくともゲームが行えるようにルールを変えていく必要があると考えられ、例えばソフトボールを種目とするこのスポーツ活動では、「試合時には常時2人以上の既婚女性及び40才以上の男性が出場していなければならない」というルールを規定し、このため「打ち易さ」を保証するために、ピッチャーはスローピッチで山なりのボールを投球することがルール化されている。つまりオフィシャルなソフトボールのルールを上記のように変え、従来のソフトボールゲームがレクリエーション化されていることにも、このスポーツ活動の特徴をあげることができる。

実際にこの地域スポーツ活動の主要目的を、チームリーダーに2項目以内で選択してもらった合計を見てみると(表2)、3市において共通して多い活動目的は「参加者間の交流を図ること」と「健康や体力の保持増進を図ること」であり、反対に少ない活動目的は「技術を向上させること」と「ゲームに勝つこと」となっている。

またそれぞれ異なる11項目の活動目的に対し被調査者に、①「該当する」②「わからない」③「該当しない」という3つの選択項目のうちから1つを選択してもらった結果を見ると(表3)、「該当する」に傾斜している上位3項目の活動目的は「運動不足解消」「好きだから」「楽しいから」であり、反対に下位3項目の活動目

表3 参加者の活動目的

	N	平均値	標準偏差
運動不足解消	948	1.15	0.40
体力の向上	937	1.37	0.59
ストレス解消	938	1.38	0.58
仲間づくり	942	1.31	0.56
住民との交流	945	1.25	0.54
つきあい	939	1.68	0.62
さそわれる	936	1.87	0.47
好きだから	948	1.19	0.50
楽しいから	943	1.19	0.52
技術向上	937	1.91	0.54
勝利	939	1.83	0.54

的は「技術向上」「勝利」「さそわれる」であることを確認できる。

従ってこの地域スポーツ活動に参加しているチームの多くは、参加者の「健康・体力の向上」や「親睦」あるいは「ゲームそのものを楽しむ」といった、レクリエーションなスポーツを目的に活動を行っているものと考えられる。

1. 活動目的の分類

この地域スポーツ活動発足の地域であり、先駆的立場にあるA市の被調査者(チーム構成員)より抽出した11項目の活動目的への回答をもとに、項目間の相関を調べたところ、相関係数の値が $r=0.40$ 以上を示した組は、「運動不足解消」と「体力の向上」、「仲間づくり」と「地域住民との交流」、「つきあい」と「さそわれる」、「好きだから」と「楽しいから」、「技術向上」と「勝利」であった。

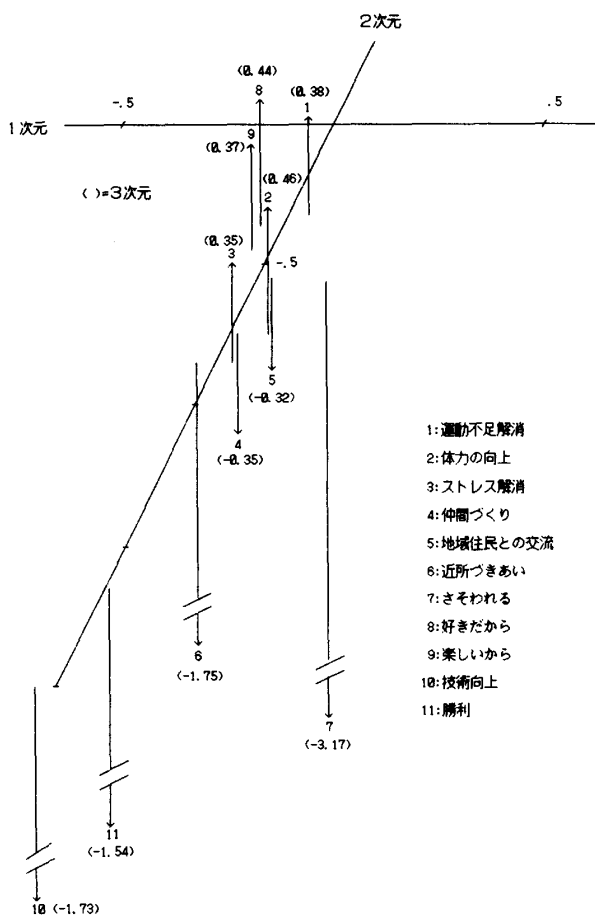


図1 活動目的の分類：A市 (N=919)

次に林の数量化理論 III 類を適用し活動目的の分類を試みた。3次元上に個々の活動目的をプロットした結果(図1), 参加者の活動目的を「楽しみ志向」「健康管理志向」「親睦志向」「つきあい志向」「競技志向」の5つに分類することができた(図2)。これによると、「楽しみ志向」「健康管理志向」「親睦志向」の3つはごく近接する空間に位置しており、またこの3者は「競技志向」とかなり離れた空間に位置していることを確認できる。従って活動目的における「親睦志向」と「競技志向」は異なった特性を持つものであることが考えられる。

2. チーム特性間の関連

地域スポーツ活動はレクリエーションなスポーツ活動であるとの見方が強いことは冒頭で述べたが、こうしたスポーツ活動においても、「技術向上」や「試合で勝つため」に目的を置

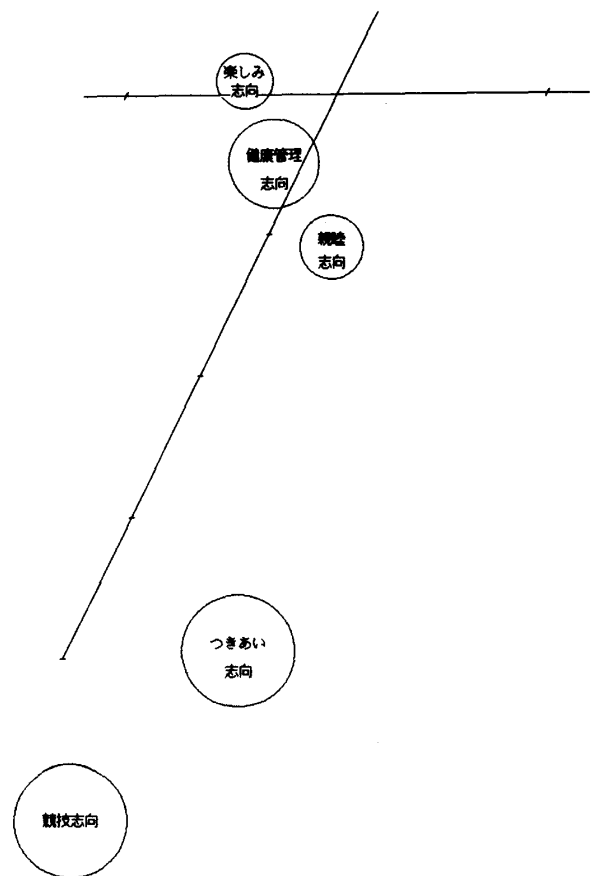


図2 各目的志向の分類

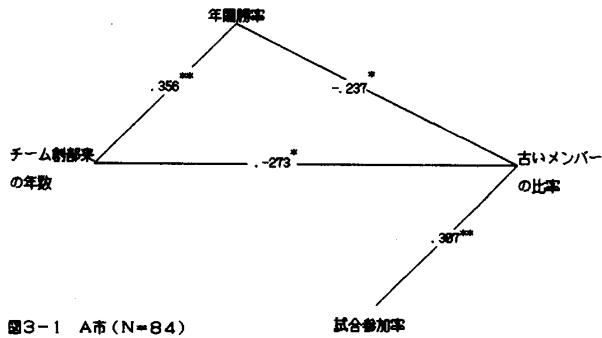


図3-1 A市 (N=84)

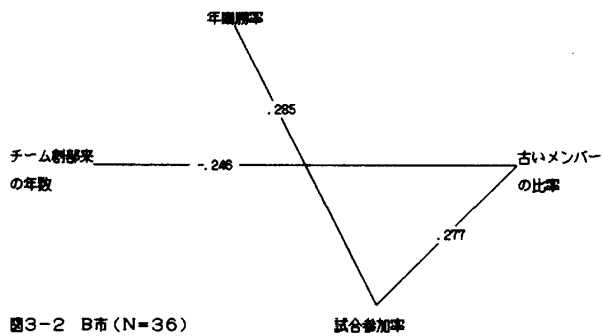


図3-2 B市 (N=36)

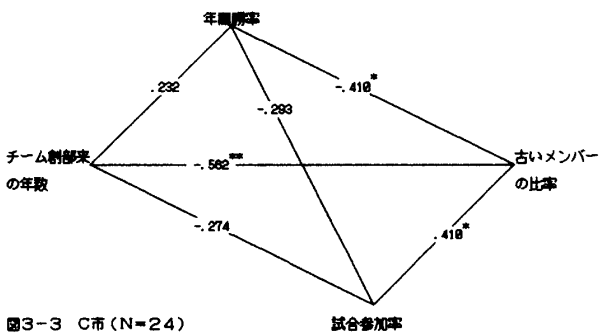


図3-3 C市 (N=24)

P<.01*** P<.05*

図3 相関ダイアグラム

いて活動を継続している参加者のいることを確認できた。我々は、この「競技志向」が「親睦志向」といかなる関係をもって存在しているのかを検討するために、次に、本研究でチームの属性とした「チーム創部来の年数」「年間勝率」「古いメンバー率」「試合参加頻度」といった4変数間の相関を調べた。

3つの市において共通する結果に、「創部年数」と「古いメンバー率」との間には負の相関が認められ、「古いメンバー率」と「試合参加頻度」との間には正の相関が認められるということがあげられる。「古いメンバー率」は継続的なメンバー間の交流の程度を表す変数であると同時に、メンバーの「新陳代謝率」をも表す変数でもある。従って「古いメンバー率」と「創部年数」との間の負の相関は、ごく一般的な結果であると考えられる。一方「試合参加率」は横断的なメンバー間の交流の程度を表す変数であるが、この変数と「古いメンバー率」との間には正の相関が認められていることから、チームメンバーの試合参加を促進させることが、メンバーの活動継続につながるという傾向が窺える。

そして「競技志向」と「親睦志向」との間の関連、すなわち「年間勝率」と「古いメンバー率」、または「試合参加率」との間の関連であるが、A市においては「年間勝率」と「古いメンバー率」との間に負の相関が認められ、C市においては「年間勝率」と「古いメンバー率」、あ

表4 相関行列

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1: 運動不足解消	.47**	.28**	.15**	.07	.03	.03	.08	.14**	.09*	.04
2: 体力の向上		.35**	.17**	.15**	.10*	.07	.15**	.17**	.13**	.13**
3: ストレス解消			.31**	.14**	.16**	.09*	.18**	.27**	.19**	.14**
4: 仲間づくり				.51**	.26**	.04	.10**	.16**	.20**	.18**
5: 住民との交流					.27**	.05	.07	.10*	.14**	.13**
6: つきあい						0.41**	.01	.08	.17**	.19**
7: さそわれる							-.05	.03	.23**	.13**
8: 好きだから								.53**	.20**	.19**
9: 楽しいから									.20**	.23**
10: 技術向上										.47**
11: 勝利										

P<.01 * P<.001 **

るいは「試合参加率」との間に負の相関が認められた。さらにこの2市では、「年間勝率」は「創部年数」との間に正の相関が認められた。一方、B市では「年間勝率」と「試合参加率」との間に正の相関が認められるものの有位差は認められなかった。

以上の結果より地域スポーツ活動における「親睦志向」と「競技志向」は、ややマイナスの関係にあることが予想される。「親睦志向」はメンバーの試合参加を促進させ、メンバーの活動継続率を高くすること（あるいはメンバーの「新陳代謝率」を低くすること）で強化されるが、「競技志向」はチームが活動を継続していくにつれて、つまりメンバーの「新陳代謝率」の繰り返しによって生じていくものと考えられる。従ってメンバーの「新陳代謝率」は、地域スポーツ集団の「親睦志向」と「競技志向」を左右する1つの主要な要因であると考えられる。

まとめ

本研究の目的は、地域スポーツ集団の「親睦志向」と「競技志向」との関係を検討していくことにあった。結果を要約すると次のようになる。

1) 林の数量化理論 III 類を適用し、11 項目の活動目的を分類した結果、「健康管理志向」「親睦志向」「楽しみ志向」「つきあい志向」「競技志向」の5つに分別された。「親睦志向」と「競技志向」は類似性の低い目的志向であることが確

認された。

2) 「チーム創部来の年数」「年間勝率」「古いメンバー率」「試合参加率」という4つのチーム属性の相関を調べ、「親睦志向」と「競技志向」の関係を検討していった結果、両者の関係はネガティブな関係にあることが考察された。

以上の結果より、地域スポーツ活動における「親睦志向」と「競技志向」は、異なる特性を有する目的志向であると考えられる。そして地域スポーツ集団における2つの活動志向の関係を推測すると、「親睦志向」に傾斜するスポーツ集団はメンバーの「試合参加率」が高く「新陳代謝率」が低いという傾向があり、一方、「競技志向」に傾斜するスポーツ集団はメンバーの「試合参加率」が低く「新陳代謝率」が高いという傾向にあると考えられる。従って地域スポーツ集団がこの2つの目的志向を同時に有することは、多かれ少なかれ困難なことであると考えられる。また、こうした傾向はもう1つの複雑な問題を抱えている。つまり、メンバーの試合参加を促すと、「新陳代謝率」が低くなりメンバーが固定化されていき、地域住民がこの地域スポーツ活動に参加する機会が少なくなっていくといった、地域集団編成の観点から見た場合の機能の低下である。

このようにメンバーの「新陳代謝率」は、地域スポーツ集団の「親睦志向」と「競技志向」、あるいは地域集団編成を目的とした場合の「正機能」と「逆機能」を左右する1つの主要な要因であると考えられる。

表5 チームの属性

	A市 N=84		B市 N=39		C市 N=24	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
チーム創部来の年数	8.4	3.0	7.4	3.8	8.4	2.5
古いメンバーの比率*)	48.0	33.2	43.0	25.8	44.0	32.0
試合参加率**)	72.0	23.5	61.0	16.7	46.1	22.5
年間勝率	47.0	28.8	42.0	25.5	59.3	23.6

*) 「古いメンバーの比率」= 「チーム創部来より活動を継続しているメンバー数」/ 「チーム構成員数」

**) 「試合参加率」= 「試合時に集まるメンバー数」/ 「チーム構成員数」

参考文献

1. 家田重晴, 保健行動理論に関する研究(6) 多次元尺度法を用いた保健行動の試み, 第33回日本学校保健学会報告, 1986。
2. 江橋慎四郎, 社会体育, 体育教育の原理, 東京大学出版会, 7版, pp. 260-279, 1987。
3. 金崎良三, 徳永幹雄, 高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究, レクリエーション研究, 11号, pp. 27-38, 1984。
4. 金子守男, 地域スポーツ集団の社会的機能に関する研究: 大府市「とうちゃんソフトボール」の事例研究, 中京大学体育学研究科修士論文, 1987。
5. 金子守男, 守能信次, 地域スポーツ集団のコミュニティ活動に関する一考察: 大府市「とうちゃんソフトボール」の事例より, レクリエーション研究, 17, pp. 13-20, 1987。
6. 中島豊雄, 地域スポーツ集団の存続と変容: 津市婦人バレーボールクラブの事例研究, 名古屋大学総合保健体育科学紀要, 3巻, pp. 81-97, 1980。
7. 本多正久, 島田一明, 数量化理論 III 類, 経営のための多変量解析法, 産業能率大学出版部, 8版, pp. 122-138, 1977。
8. 守能信次, わが町のとうちゃんソフトボール, 月刊社会教育, 346号, pp. 32-37, 1985。
9. 守能信次, 地域スポーツ活動と伝統的地域集団の再編, 体育の科学, 杏林書院, 7号, pp. 497-500, 1988。
10. 柳井晴夫, 岩坪秀一, 数量化 III 類, 複雑さに挑む科学, 講談社, 15版, pp. 231-240, 1983。
11. 李真, チームの年齢構成の違いが地域スポーツクラブへの参加に及ぼす影響に関する一考察, 日本スポーツ教育学会第8回大会・東海体育学会第36回大報告, 1988。
(著者: アルファベット順)